

NPO法人設立に当たって

今年、2018年1月、昭和のくらし博物館は「特定非営利活動法人（NPO）昭和のくらし博物館」となりました。このことについての御挨拶と、あらためてご協力いただきたくお願いを申し上げます。

昭和のくらし博物館は1999年2月、私の一家が戦後の1951年から47年間くらしていた茅屋が無くなったので、戦後の住宅と、そこで営まれていたくらしをつたえる場所として、博物館という形で公開することにしたものです。我が家は戦後政府の住宅政策の一つの柱であった個人住宅への融資である住宅金融公庫の最初期の融資を受けて建てた公庫住宅であったこと、設計したのが当時、東京都庁の建築課の職員で、公庫住宅の審査に当たっていた父であったことで公庫住宅としては模範的な設計だったことから、戦後の庶民住宅の資料として重要だと考えたからです。それともう一つ、日本の建築文化財保存は、建物だけに限られていて、家具や家財など、その建物がどう使われたということを物語る資料は慮外視されているので、家財もろとも残すことによって、戦後のくらし全体を保存・公開しながら後世に伝えようと考えたのです。

とはいえ、いくら規模が小さいとはいえ、力もない個人が為すには、力に余る無謀な試みでしたし、またこのような小規模で粗末な住宅は、国も行政も決して保存してくれないことはわかりきっていました。でもこの時代、一般庶民は大多数がこの程度の家に住み、この程度の家財でくらしていたのです。その意味では戦後の日本民衆生活の一つのモデルでもあります。このためなんとか民衆の遺産として残しておくべきだと考え「昭和のくらし博物館」と名付けて出発したのです。

不安を抱えながらの出発でしたし、たしかに幾多の困難には遭遇しましたが、それでも多くの人々のお力を得て、「家を残し くらしを伝え 思想を育てる」をモットーとして19年間、歩み続けて来ることが出来ました。来年は20周年です。このことについてみなさまには心から感謝しております。

おかげさまで、これも多くの方々のご協力によって、展覧会、講座、講演会、映画上映、体験学習、出版等々と博物館活動も活潑に行っており、見学者にもたいへんに喜ばれております。外国人などは、やっと本当の日本人のくらしがわかったといって喜んで帰られます。そのほか雑誌やテレビにも、しばしばとりあげられますが、いまや、畳も障子も、火鉢も薬缶も知らない人が多くなってしまった現在、ここは昭和時代の生き証人としても貴重な存在になっています。このように普通の家を丸ごとくらしの状態にしてあって、中に入ってみることが出来る場所は、ほかにありませんので、今後、ますます社会的に有意義な施設となって行くものと思います。

そこでこの博物館を、このままの形で後世に伝えて行くために、このたび法人化することにしたのです。法人化することによって、事務仕事が増え、責任も重くなりますが、社会的信用を得られ、行政面でもオーソライズされるため、基盤がよりしっかりすることになります。このことをご理解の上、館を支えていただくと共に、ご一緒に、博物館の活動にご参加下さって、くらしについて勉強したり、生活技術を学んだり、若い人や子供たちを育てたり、しようではありませんか。

2018年5月

NPO法人昭和のくらし博物館 理事長・館長
小泉 和子